

## C-61

気管・気管支形成術19例の検討  
天理よろづ相談所病院 胸部外科  
長澤みゆき 鈴木雄治 神頭 徹 北野司久

【目的】当科において気管形成術および気管支形成術を施行した症例につき、治療成績を検討したので報告する。【対象】1968年4月から1993年12月までの肺癌手術例538例中、気管支および気管形成術19例(0.04%)を対象とした。男性17例、女性2例で年齢は37~79(平均59.9)歳である。病期はⅠ期6例、Ⅱ期4例、ⅢA期5例、ⅢB期1例、Ⅳ期1例であった。組織型は扁平上皮癌12例、腺癌2例、腺様嚢胞癌2例、粘表皮癌、カルチノイド1例、その他腎癌転移1例であった。

【結果、及び考察】術式は、左上切5例、右上切6例、右下切2例、右全摘1例、上中切2例、中下切2例、気管環状切除1例であった。リンパ節転移は8例(N1、N2各4例)であった。断端陽性例は2例で、術後放射線療法を併用した。その他に放射線療法を併用したのは5例、化学療法を併用したのは5例であった。予後は、断端陽性例のうち1例が35カ月で局所再発し癌死、4例が他病死した。非担癌生存9例、担癌生存5例であった。低肺機能症例1例に術後無気肺が認められた他は合併症を認めなかった。

術式、適応、経過、予後などに考察を加え報告する。

## C-62

気管支動脈を温存した肺癌気管支形成術  
慶應義塾大学医学部外科

○菊池功次、成毛聖夫、山畑 健、泉 陽太郎、  
江口圭介、柿崎 徹、澤藤 誠、川村雅文、  
加藤良一、小林紘一

肺癌気管支形成術症例に対し、リンパ節郭清を行う際、気管支動脈の温存を心がけて手術操作を行ってきたのでその成績について報告する。

(対象) 気管支形成術を行った肺癌症例のうち、1982年以前の17例を前期、気管支動脈を温存するようになった1982年以後の65例を後期として合併症の発生率や予後を比較検討した。

組織型別分類は前期では扁平上皮癌12例、腺癌 3例、小細胞癌 1例、その他 1例で、後期では扁平上皮癌37例、腺癌14例、小細胞癌 7例、大細胞癌 3例、その他 4例であった。術後病理病期分類は前期ではⅠ期5例、Ⅱ期 1例、Ⅲ期 9例、Ⅳ期 1例で、後期ではⅠ期16例、Ⅱ期 8例、Ⅲ期39例、Ⅳ期 2例であった。

(成績) 吻合に関する合併症は前期では17例中気管支肺動脈瘻、縫合不全、気管支断裂各 1例ずつで17.6%であった。後期では65例中吻合部狭窄の 1例のみで、1.5%であった。小細胞癌を除いた気管支形成術後 5年生存率は前期では46.2%、後期では42.5%であった。

(まとめ) 肺癌気管支形成術例においてリンパ節郭清時、気管支動脈を温存する手術を行った症例では吻合にかかわる合併症は減少していた。また術後 5年生存率に差は見られなかった。

## C-63

高齢者肺癌に対する気管支形成術の検討  
長崎大学第1外科

○岡 忠之、井手誠一郎、新宮 浩、森永真史、  
高橋孝郎、赤嶺晋治、辻 博治、原 信介、  
田川 泰、川原克信、綾部公懿、富田正雄

【目的】高齢者肺癌に対して気管支形成術を施行した症例につき臨床的検討を行ったので報告する。

【対象及び結果】1993年12月までの13年間に、当教室にて年齢が70歳以上の原発性肺癌に対し、気管支形成術を施行した28例(以下BP群)を対象とした。男性25例、女性3例、年齢は70~81歳(平均74歳)、組織型は扁平上皮癌20例、腺癌6例、小細胞癌1例、癌肉腫1例であり病理病期はⅠ期9例、Ⅱ期5例、ⅢA期9例、ⅢB期3例、Ⅳ期2例であった。26例(92.9%)に呼吸機能障害、高血圧、不整脈などの術前合併症を認めた。術式は1葉管状切除24例、2葉管状切除3例、区域管状切除1例で13例(46.4%)に合併切除が行われた。術後の合併症は不整脈11例、喀痰喀出障害8例、縫合不全6例(3例に再手術)、消化管出血2例など全体で21例(75%)に発生し、70歳以上の肺癌での肺全摘術群(以下PN群)6例での術後合併症の発生率(83.3%)と比し有意差はなかった。5生率はBP群68.2%、PN群33.3%とBP群が良好であった。術死はBP群4例(14.3%)、PN群3例(50.0%)とBP群が低率であった。

【結論】高齢者の肺門型肺癌に対し、根治性において可能な限り術式として肺全摘術よりも気管支形成術を選択し、肺の機能温存に努めるべきである。